

マラソン大会が行なわれ、女子も前年度の競歩にかわってマラソンを行なった。

宮川移転以来、芦屋高校の施設・設備は一応整ったものの、より一層の充実をはかるためには校地の拡張が急務であった。当時、家庭科教室の新築が南運動場に計画中であり、このままではそこにあるテニス・バレー・バスケットの諸コートが使用できなくなる恐れがあった。また図書館・体育館・プールなどの諸施設を充実させるべき校地も、高校として必要であった。さらに芦屋市内の芦高入学希望者数から考えて、数年後には各学年10学級、計30学級の大規模校となることが予想されていた。そこで1949

(昭和24) 年8月2日の育友会理事会および評議員会で、「校地拡張の為の寄附募集に関する趣意書案」が審議された。それは、1口1000円で200万円の寄附を集め、学校北側の1区画1900余坪を購入するという計画であった。しかし、この計画は折衝の結果不調に終って中止された。これにかわり、市有地で緑地帯にする予定であった土地を第二運動場することが計画された。そのために育友会は、換地用の土地として宮塚町に2ヵ所、精道町に1ヵ所の計1390.87坪(4589.9平方メートル)の土地を購入し、1950(昭和25)年3月17日および8月31日、9月2日にそれぞれ県に寄附した。そして育友会は、同年4月1日に芦屋市との間で、育友会の購入した土地と市の緑地帯予定地との交換について契約した。土地購入と第二運動場建設に要した金額は約230万円で、1949(昭和24)年度初めに中止していた月額100円の設備資金の徴収を11月より復活すること、1950(昭和25)年度入学生には1口1000円の入学寄付金に協力してもらうこと、父兄に定期預金をしてもらって育友会が神戸銀行から融資を受けることなどで調達された。当時本校の父兄であった笠谷定夫氏が非常に安い価格で工事を引き受け、コート8面からなる第二運動場と野球のバックネットがあわせて建設された。

第二運動場の完工式は1950(昭和25)年9月1日に行なわれた。現在、第二運動場には体育館・プール・バレーコートがある。同日に、南館教室の使用もはじまった。南館は長谷川工務店の施工により、

484万5890円の費用をかけて建築された木造2階建校舎で、洋裁教室・割烹教室・洗染教室などの家庭科教室を中心に教室10、準備室2で、建坪173.4坪(572.2平方メートル)であった。南館の完工式は11月30日に行なわれた。

1951(昭和26)年2月27日に芦高第3回卒業証書授与式が行なわれた。男子218名、女子42名、計260名の第6期生が卒業した。学力優等賞が1名、功労賞が2名、自治会賞が97名に授与された。なおこの時から、本校の中西清教諭のデザインおよび大阪造幣局の調製になる楯が功労賞に対して、メダルが自治会賞に対して贈られることになった。さらに過去の受賞者にも追贈された。

3月31日に第2代校長阪部由松氏が願により本校校長を免ぜられた。阪部校長の8年間は、芦高にとって試練の時期であり、また発展の基礎が築かれた時期であった。戦災とそれに続く廃校の危機、そして新生芦屋高校の発足と生徒自治の確立。今日芦高に関わる者が等しく誇りとする自由な校風は、まさにこの時期に培われたものであった。阪部校長は退任にあたり、「およそ学校の真価は、上級学校に入学した数によって決定せられるべきものではなくて、卒業生が社会でいかに活動するかによって定まる」との立場から次の言葉を芦高生に残した。

「本校のスポーツが衰える時、それは本校校風の衰微する時である。体育運動を盛んにすれば、従って気力も盛んになり、学問も向上するのである」(「芦高十五年史」)

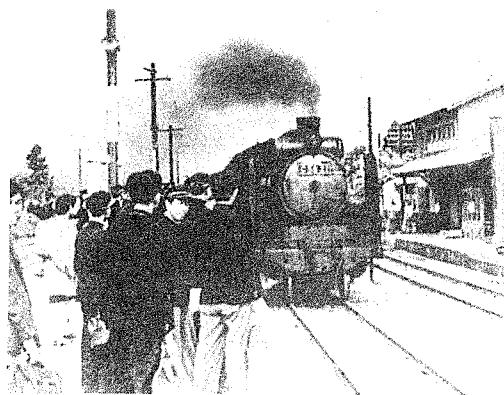
2 野球部全国優勝のころ(1951~54年)

1951(昭和26)年4月1日に、兵庫県立姫路西高等学校長飯野竹二郎氏が第3代本校校長に補せられた。11日に始業式ついで入学式が行なわれた。

この4月から、放送部が自治会の書記局外局となった。本校は戦災にあって分散授業を強いられ、学校の諸設備も不充分であった。ようやく1950(昭和25)年2月に、第一職員室の一隅を放送室としてナショナルの30ワット拡声器が設置され、4月から主に伝達や昼食時の音楽を放送するようになった。

そして1951（昭和26）年2月28日に、出力を増大させた校内放送設備が設置され、生徒たちもしだいに機器の操作になれ、この4月から放送部が自治会の書記局外局となったのである。なお1952（昭和27）年8月には、南館竣工にともないアンプ1基が追加され、またテープレコーダーが購入されてラジオ番組や校内諸行事の録音・放送が行なわれるようになった。1953（昭和28）年3月には各教室に拡声器が設置され、9月には100ワットアンプが設置されて運動場にも放送が届くようになった。同時に放送室が拡張され、スタジオと器械室に分けられた。さらに1954（昭和29）10月には、懸案の独立放送室が45万円の予算で本館1階に新築され、配線替えを行なって学年ごとの放送も可能になった。また放送を各教科の授業の面に生かそうという趣旨で、放送教育委員会が組織されたりもした。

5月2日に1年生は洲本、2年生は琵琶湖への春の遠足があり、22日に3年生が箱根・東京・日光方面および別府・阿蘇方面へと分かれて2泊3日の修



九州方面への3年生の修学旅行

学旅行に出発した。秋の遠足は10月20日に行なわれ、1年生は有馬、2年生は六甲・箕面、3年生は奈良・仁川・箕面へと出かけた。7月19日には生徒有志の参加による遠泳が行なわれた。また第3回記念祭は10月7～14日に行なわれた。第7回体育祭では、従来の学校杯・市長杯に加えて同窓会杯・自治会杯が授けられることになった。学校杯は1947（昭和22）年度の第3回体育祭から、市長杯は1949（昭和24）年度の第5回体育祭からはじまった表彰制度である。講演は阪大助教授森昭氏の「物の考え方について」

で、音楽会の出演者はヴァイオリンの遠藤磨里氏であった。全校マラソン大会は11月22日に行なわれた。

この年度の主な文化行事としては、6月9日に大阪市立美術館の「マチス展」見学があった。ついで7月17日には毎日新聞外信部長板倉氏の講演「日本の将来」があった。まさにこの年は、4月にマッカーサー元帥が解任され、9月8日にはサンフランシスコ対日講和条約および日米安全保障条約が調印され、日本は大きな転換点にさしかかっていた。そして12月21日には、神戸大学北野教授の講演「社会と経済」があった。

硬式野球部は7月31日に兵庫予選に優勝し、甲子園の第33回全国高校野球選手権大会に出場した。8月17日の第3回戦、準々決勝で第31回大会と同様に高松一高と対戦し、またしても2-6で敗れた。しかし、植村義信・石本健二郎のバッテリーを中心とする野球部の活躍は、この年から翌年にかけて特筆すべきものがあった。また、10月25日から広島を中心開かれた第6回国民体育大会には、本校から硬式野球部・硬式庭球部・軟式庭球部・サッカー部・山岳部の5部、40数名が出場した。野球が2位、硬庭も2位、軟庭が3位の成績をおさめた。このころは野球部を筆頭に、県大会・近畿大会はもちろん全国大会に出場して活躍する部が多く、軟庭は7月の全国大会で4位の成績をあげていた。

10月20日には、東亜組の施工により、中館西側2教室・女子更衣室および体育教官室・図書館・女子便所の増築が完工した。とくに112万円を費やして建設された図書館は、独立別棟50坪（168平方メートル）のこじんまりとしてはいるがスマートで設備の整った建物で、読書室27坪、書架13坪、事務室8坪、玄関2坪からなり、収容人員は72名であった。教室の増築に追われていた当時としては、新しい独立図書館をもつ高校は県下ではあまり例のないことであった。各校からの視察も多く、ずいぶんうらやましがられたという。その後、芦高が先例となって各地の高校もしだいに独立図書館をもつようになった。本校図書館は、1945（昭和20）年の戦災で全図書を焼失して以後、1947（昭和22）年2月の県

債発行による備品費として約70万円の予算を得て、基本図書3000冊を購入して再出発した。やがて日本十進分類法による図書の分類整理を終え、本校図書館は同年6月から本館2階の8坪の部屋を書庫とし、東隣教室を閲覧室として開館した。1950（昭和25）年6月に本校図書館は兵庫県図書館協会に入会し、9月には南館2階32坪の部屋を図書室とした。同月から林敏男教諭により、1年生全員に必須科目として毎週1時間の図書館学の授業が実施されるようになった。そして1951（昭和26）年に待望の新図書館が完成したのである。同時に、暗幕装置を施して100ワットの小型幻灯機を購入し、ロングホームルームなどにおける視聴覚教育の歩みがはじまった。この年の蔵書数は4469冊であった。また1年生に対する図書館学の授業や製本および修理の実施は、県下の高校の先駆けをなすものであった。しかし、残念なことに林教諭は1952（昭和27）年11月に交通事故のため死去された。その後も芦高図書館は着実に発展して今日にいたっている。

1952（昭和27）年2月27日に芦高第4回卒業証書授与式が行なわれ、男子330名、女子158名、計488名の第7期生が卒業した。この時の男子は、旧制中学校入学生の最後の卒業生でもあった。学力優等賞が1名、技能賞が2名、自治会賞が135名に授けられた。この時から設けられた技能賞は、功労賞が本人の技能のみならず校内的な影響を重視したのに対して、個人の技能を重視して与えられるもので、両者は同等とされて功労賞と同じ楯が贈られた。ただネームプレートが功労賞は金、技能賞は銀を用いて区別された。

第24回全国選抜高校野球大会に出場した本校野球部は、優勝候補と騒がれながら、4月3日に平安高校と2回戦で対戦して0-1で惜敗した。いよいよ野球部の全国制覇の年がはじまった。なおこの年から神戸学区では中学区制が採用されたが、芦屋学区では従来通りの小学区制が維持された。

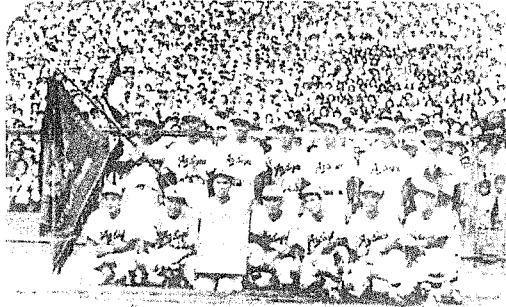
1952（昭和27）年4月8日に入学式が行なわれ、5月2日に春の遠足が実施され、1年生は洲本、2年生は姫路、3年生は六甲・奥池へ出かけた。前年まで3年生は修学旅行をひかえているため、遠足の

日に実力考査が行なわれていたが、この年は遠足の実施となった。15日に3年生が、東京・日光方面150名、別府・阿蘇方面270名と分かれて4泊5日の修学旅行に出発した。3年生が帰校した19日には、1・2年生は西宮球場でオールアメリカン=サーカスを見学した。なお秋の遠足は11月1日に実施された。

1952（昭和27）年度は、野球一色で文化行事が少なかったが、この年に音楽部とそのOBを中心に、二管編成、約50名からなる全芦高管弦楽団が組織された。高校の管弦楽団としては先駆的なものとして注目をあびる中で、6月14日に第1回演奏会が開かれた。その後、1953（昭和28）年6月18日に第2回、1955（昭和30）年6月20日に第3回、1957（昭和32）年7月1日に第4回の演奏会が開かれている。6月16日に本校卒業生の海徳敬次郎（ヨット）・神田和男（ボート）両氏のヘルシンキ=オリンピック大会出場壮行式が行なわれた。また両氏を援助するためオリンピック募金も行なわれた。日本のオリンピック参加は、戦争をはさんで16年ぶりのことであった。また、これに先だって4月28日には対日講和条約が発効し、日本は主権を回復して国際社会への復帰がはじまろうとしていた。6月30日から大阪大学生24名（文・理学部）の1週間の教育実習がはじまった。9月15日からも19名による教育実習が行なわれた。阪大生の教育実習受入れは、途中2年間をはさんで1960（昭和35）年まで続けられた。このころ、本校より阪大への進学者が多かったため、阪大生を受け入れたのである。

7月16日に全国高校野球選手権大会兵庫予選がはじまり、8月3日の対育英高校戦に、本校野球部は8-1で勝って優勝した。第34回全国高校野球選手権大会に、前年に続いて連続出場した芦高野球部に対し、本校関係者はもちろん、芦屋市民さらには兵庫県民は大きな期待を寄せた。芦高は優勝候補の筆頭に挙げられ、そして期待にたがわぬ活躍ぶりで山形南高校・新宮高校・柳井商工高校・成田高校を次々と破り、8月20日の決勝に進出した。第21回選抜高校野球大会の決勝戦では大阪代表の北野高校に惜敗したが、今回の決勝戦の相手はまたしても大阪

代表の八尾高校であった。試合は芦高の先攻ではじまり、1回に両者1点ずつ得点し、そのまま同点で迎えた5回裏に八尾高はノーアウト満塁の好機を得た。しかし、芦高ナインはよくこのピンチをしのぎ、トリックプレーをはじめて無得点に押えた。逆に7回表に芦高は一死満塁のチャンスを迎え、走者一掃の二塁打が飛び出して3点を加えた。結局これが決勝点となり、芦高は4-1で八尾高を降し、夏の甲子園出場5度目にして全国制覇を実現し、深紅の優



野球部全国優勝

勝旗が石本主将の手に渡され、芦高校歌が甲子園球場に響きわたった。芦高の優勝は、1923（大正12）年の第9回大会で甲陽中学が優勝して以来、兵庫県勢として実に29年ぶりの栄冠獲得でもあった。この時、ピッチャーをつとめた植村氏は、次のように当時の思い出を記している。

「九回を終えて両軍あいさつをしてベンチに帰りながら、私はこの大会の優勝という大偉業が周囲のざわめきの中に何か他人事のように思えて現実感が湧かなかったといえば、人は不思議に思うだろう。しかし酷暑の七日間、連投々々に心身ともに疲れ果てた身には感受性がなくなっていたというのか、疲労度の方が強かったのである。

ただベンチへ引揚げて丸茂先生や橋本さん（先輩）の涙を見た時はじめて優勝のうれしさがよろこびとも感激ともつかぬ涙となってせきを切ったように流れ全員輪になって泣いてしまったものである。

今当時を回顧するに優勝楯のずっしりした重みがグラウンドを一周する時に身にこたえた以外いかに身に感じる何ものもない。夢のようだった。

事実今も夢のような想い出である」（「芦高十五年史」）

芦高野球部の全国優勝は、本校の自由な校風にもとづく自治活動と教育の一つの結実であった。8月22日付けの「朝日新聞」阪神版の見出しには、「これが芦高の勝因だ、“自由”を得たナイン、“強制”されない優勝」とある。もとより夏の高校野球への参加校が、1000校を超えた程度の当時と4000校に達しようかという現在とでは、質的にも大きく変化しているため、単純に同一視することは出来ない。しかし、当時の芦高生は勉学に、スポーツをはじめとするクラブ活動にと充実した日々を過ごし、さらに県下でもっとも自由な高校として楽しい学園生活を謳歌していたのである。

優勝当日には、夜遅くまで選手たちは市中を引っ張り回され、芦屋市庁バルコニーにおいて市民の歓迎に答えた。翌21日に、校庭において優勝旗・優勝楯・賞状の納入式が行なわれ、23日に芦屋市民による優勝祝賀の提灯行列が行なわれた。さらに27日には育友会主催で優勝選手慰労会が開かれた。

この年の記念祭は、10月5日から12日までの1週間をかけて行なわれた。講演は京大教授田中正三氏の「生命の宿るもの」、音楽会は市来崎のり子氏のソプラノ独唱であった。10月に東北地方で開かれた第7回国民体育大会には、硬式野球部と山岳部が出場し、野球部は仙台で行なわれた23日の決勝戦で盛岡商業に惜しくも0-1で敗れた。11月21日には全校マラソン大会があり、生徒たちは男子8000メート



全校マラソン大会

ル、女子2000メートルの距離を走った。同月29日には、自治会主催の阪神間中学校優勝弁論大会が開催された。

1953（昭和28）年2月27日に、芦高第5回卒業証

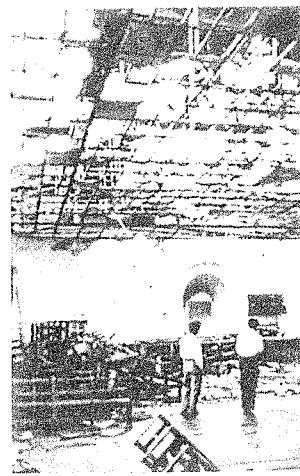
書授与式が行なわれ、第8期生男子303名、女子188名、計491名が卒業した。学力優等賞が2名、この年から設けられた皆勤賞が4名、功労賞が3名、技能賞が6名、自治会賞が97名に与えられた。

1953（昭和28）年4月8日に始業式について入学式が行なわれ、新しい年度がはじまった。なお、この4月から授業料が値上げされ、全日制は500円となった。5月2日に遠足があり、1年生は洲本、2年生は伊勢にそれぞれ出かけ、3年生には実力考查が実施された。5月23日に3年生は別府・阿蘇方面への4泊5日の修学旅行に出発した。前年に続いて、6月18日に第2回芦屋高校管弦楽団演奏会が精道小学校講堂であり、29日から大阪大学生の教育実習があった。また6月20日には校内弁論大会が開かれた。7月16日には、生徒は国・数・英の標準学力検査を受けた後、午後から本校講堂で狂言を鑑賞した。

この年も野球部は、前年の余勢を駆って8月4日の兵庫予選に育英を破って優勝し、甲子園の第35回全国高校野球選手権大会に出場した。夏の選手権は6度目であった。本校野球部は15日の第2回戦で御所実業と対戦し、本屋敷錦吾君などの活躍もあったが、延長10回に0-1で敗れた。

9月1日に、南館東側に生物・芸能教室4と準備室2の増築工事が竣工した。施工は神井建設株式会社で、建築費は465万7000円であった。県教育委員会では、高等学校の必要教室数を学級数の1倍半としたため、本校では45教室が必要とされていた。1952（昭和27）年度当初には、本校ではなお10教室が不足していたので、その年の予算に計上して増築工事がはじめられていたのである。この結果、本校は普通教室は27、理科教室5、家庭科教室4、芸能教室3、計39教室となった。

9月14日からの阪大生の教育実習が終了してまもない25日に、台風13号の襲来によって本館3階にある講堂の屋根が大破した。さらに中館および渡廊下の屋根や野球のバックネットなど、本校は相当の被害を受けた。当時の本館は、宮川小学校以来の鉄筋コンクリート3階建の建物で、1945（昭和20）年8月に戦災にあい、終戦直後に資材不足の中で応急修理がなされたものであった。そこで芦高としては、



台風の被害を受けた本館講堂

危険性があることや汚損度も激しいことから、県当局に対してしばしば講堂の改修を要望していた。ようやく1953（昭和28）年度の予算において、県当局は講堂修繕費425万円を計上し、見積りの結果判明した不足額85万円は地元において負担するように申し入れてきた。

7月10日に育友会緊急理事会および評議員会が開かれ、育友会で40万円、芦屋市で45万円を引き受けることになり、臨時の育友会費月額100円を徴収して計116万円が調達され、地元負担金および講堂内の諸設備費に充当することが決められていた。

ところが9月の台風13号で講堂が全壊したため、県当局は急いで設計を変更し、再度見積もると613万円の工事費が必要となった。県当局は超過額103万円のうち、53万円を県費で支出することにし、50万円をさらに地元が負担するように申入れてきた。10月1日に育友会緊急理事会が開かれ、先に予定した116万円を計90万円におよぶ地元負担金の引受け財源とすることにした。10月17日には県から学校に対し、工事落札にあたって県が工事請負人に支払うべき150万円の調達がつかぬため、育友会が一時その金額を調達するようにとの申入れがあり、本校育友会はこれも了承した。こうして講堂改修工事は、12月1日に尼崎市の鳶種組が589万円で落札し、着工の運びとなり、翌1954（昭和29）年7月17日に竣工した。工事費のうち、県負担額は447万8500円、芦屋市負担額は45万円、本校育友会負担額は66万1600円であった。このほか内部設備費として、育友会は照明器具やスポットライト・カーテン・ピアノなどに191万6725円を負担した。

1953（昭和28）年度の記念祭は、会場となる講堂が台風被害により使用不可能なため実施が危ぶまれ

たが、自治会執行委員会および3年生の熱意により10月4日から11日まで開催された。記念祭は3会場



第5回記念祭の体育祭

に分かれて行なわれ、体育祭・展覧会は本校、講演会・弁論大会・音楽会は宮川小学校講堂、公演は精道小学校講堂であった。講演は神戸大学教授塩尻公明氏の「善なる人間と幸福なる人間」、音楽会の出演者は関西室内楽団（神沢哲郎・小杉博英・伊達三郎氏）およびソプラノ独唱の浜田洋子氏、ピアノ伴奏の伊藤筍子氏であった。前年度の野球部全国優勝の刺激もあり、この年から従来の全関西高等学校優勝弁論大会にかわり、全国高等学校優勝弁論大会が開かれるようになって記念祭の行事に加わった。第1位には学校杯と兵庫県知事杯、第2位には準優勝楯と芦屋市長杯、第3位には芦屋市會議長杯が用意され、審査員長には朝日新聞社の八山作一氏があつた。第1回は台風13号やウィークデーの影響もあり、残念ながら出席した弁士の人数が予定より少なかった。ともかく、こうして1学期は校内大会、2学期は全国大会、3学期は前年からはじまった阪神間中学校大会というふうに弁論大会の年中行事が整った。全国大会は第6回から11月、さらに6月へと時期が変更されながら、1962（昭和37）年の第10回まで続いた。芦高がこのような全国的視野に立つ行事を主催できたことは、現在の芦高に思うにつけてもまさに感無量である。

この年は硬式野球部・ラグビー部・卓球部が、四国で開催された第8回国民体育大会に出場した。10月20日に出発し、野球・ラグビーは徳島、卓球は松山で試合を行なった。11月2日に秋の遠足が行なわれ、1年生は布引・修法ヶ原、2年生はクラス別に六甲・箕面・生瀬方面、3年生も同じくクラス別に

京都保津峡・奈良・箕面方面に出かけた。そして11月21日に全校マラソン大会が行なわれた。

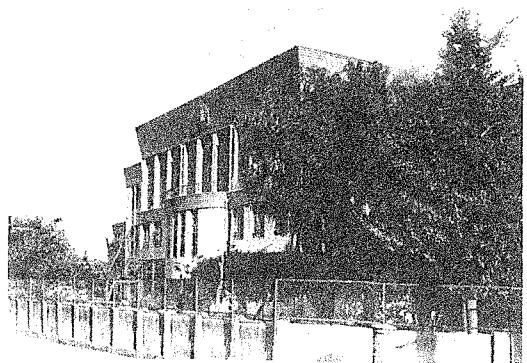
1954（昭和29）年2月27日に、芦高第6回卒業証書授与式が精道小学校講堂で行なわれ、第9期生男子331名、女子201名、計532名が卒業した。学力優等賞が3名、皆勤賞が8名、技能賞が2名、自治会賞が94名に授与された。

3 創立十五周年のころ（1954～57年）

本校野球部は第26回全国選抜高校野球大会に出場した。本校としては3度目の選抜であったが、4月3日に2回戦で対戦した鳴門高校に3-4で惜敗した。

1954（昭和29）年4月8日に第1学期の始業式があり、翌9日に入学式が挙行され、489名が入学した。本校の入学式は、通常は始業式当日の午後に行なわれていたが、講堂が台風の被害を受けて工事中であったため、この年は始業式の翌日に、宮川小学校講堂で行なわれた。4月23日に、3年生は九州方面への修学旅行に神戸港より出発した。4月28日に春の遠足があり、1年生は洲本、2年生は吉野に出かけた。この年も例年通り阪大生の教育実習が6月24日からと、9月6日からそれぞれ1週間実施された。

1学期末の7月17日に講堂竣工式が行なわれた。



改裝なった本館

講堂の改修工事は予想外に困難で、工事が長引いていたがようやく完成したのである。なお東側の控室と階段をつぶしてステージにあてることになり、改